

# 寄せ場学会通信 8

1989年  
6月

定価 100円

学会事務局 東京都杉並区善福寺2-6-1 東京女子大学松沢研究室気付 電話 03-395-1211 郵便振替 東京8-117184  
西日本事務局 大阪市東淀川区瑞光5-8-A-204 中根光敏気付 電話 06-325-7648



## 日本寄せ場学会

### 第三回総会報告

去る五月十三日と十四日に「日本寄せ場学会」の第三回総会が東京経済大学において行われました。会場には、北海道や沖縄から参加した会員を含め、延べ七十人が集まり、メインテーマ「変貌する寄せ場」のもと、金賀汀（キム・チャンジョン）氏の記念講演や各報告、討論に参加しました。

開会のあいさつを運営委員長池田浩士氏が行いました。寄せ場学会は設立以来二年が経ち、会員は北海道から沖縄まで二百名を数える。それぞれが自分と近い寄せ場や日雇労働者との連携を取りながら寄せ場学会に結集している。また、寄せ場に住み働く仲間——最も活動的な仲間を私達はもっている。今年、現場に入ることをおして寄せ場、日雇労働者との関係を厳しく、強く求めていきたい、という内容でした。

つきに、「天皇制と朝鮮人労働者」と題しての金

賀汀氏の講演が行われました。

金氏は、まず、在日朝鮮人にとって寄せ場が「近い」ということを含めて大きな意味をもっているとして、ここ数年激増している外国人労働者と在日朝鮮人の歴史を対比しながら講演を進めました。金氏は、在日朝鮮人の労働と生活の軌跡が、現在の外国人出稼ぎ労働者とはほとんど異なることを多くの具体的な例をだしながら指摘しました。

一八八〇年代に外国人炭坑夫六名の死亡した記録があり、おそらく朝鮮人か中国人であろう。一八九八年に日本で初めて外国人労働者を雇用することを禁止する法律ができた。就労させないことと管理する方法は今の入管と同じである。

一九一〇年に「日韓併合」によって朝鮮人は「日本国民」となり、外国人労働者の唯一の例外として、日本の最底辺を形成した。最初、募集が一番多かった。政治的理由や「職を奪う」という理由で渡

航を禁止し、労働者が不足すると禁止を解除した。待遇は、単に悪かっただけでなく日本人との間に格差を必ず設け、労働者の連帯を破壊した。これらは今の外国人出稼ぎ労働者も同じである。

文化については、自分の文化で相手の文化をおしはかつてはならず、文化に優劣はなくあるのは違いである、と自分の体験をふまえて語られました。

最後に、外国人出稼ぎ労働者の受け入れ論議にふれました。外国人出稼ぎ労働者は帰らない。十年経ったら帰るところはない。日本は在日朝鮮人の歴史を教訓化してないが、もう一度とらえなおす必要がある、と結びました。

記念講演のあと、質疑討論にはいりました。

最初に池田浩士氏から、文化の問題について島木健作などを例にとりながらの提起がありました。他民族の文化に対する差別として「排除」だけでなく、優越感をもって「彼らを理解する」「彼らに合わせる」というもう一つの形の差別があるのではないか。外国人労働者から学んでいくことと外国人労働者の文化を奪うことの違いを考える必要がある、と外国人労働者との連帯のあり方への問題提起でした。沖縄出身の参加者からは、天皇の戦争責任を避けて通っていること、日本と沖縄の戦争体験は違うという意見がだされました。天皇制文化から読んで女性から、そもそも文化とは何なのか、「障害者」「女性」などいろいろな関係の中にあることをどう考えていけばいいのかという発言がありました。また、寄せ場で活動している仲間からは、寄せ場の運動の中で在日朝鮮人日雇労働者への視点がだされてない。在日の団体は「日雇はやめる」というなど否定的だが、という指摘がありました。

これらの質疑をうけて金氏から発言がありました。他民族との関係については、アイヌ支配を例に

とりながら、人間としての尊厳をもって同化に対して抵抗すること、押しつけられるものへの本能的な反発があることを付け加えました。天皇制については、朝鮮人の間では「あいつのせいだ……」の思いが日本人が考えるよりもっと大きい、それを声高には語れない状況もある。日本人は右翼に対しておびえすぎている、との指摘がありました。また、寄せ場の在日朝鮮人に関して、儒教の精神のなかに肉體労働の軽視があること、土建会社をやっている在日朝鮮人、手配師やドヤ経営者など中間搾取者として位置しているものも多いことをあげました。

司会の加藤晴康氏は、女性の発言をうけて、文化とは上から押しつけられるものではなく、お互いの関係、自分たちでつくっていくものだ、とまとめました。

これから韓国からの外国人労働者が増えてくるなか、寄せ場と在日朝鮮人、寄せ場と外国人労働者、在日朝鮮人と外国人労働者という複雑に重層的に関係している課題についてどう考え、どう関わっていくのか、私達の姿勢が問われています。アジアの日雇労働者が日本にきているわけではなく、まして聞いをしにきているわけではない。簡単に連帯できる状況ではないわけですから。

初日は、このあと事務局長の松沢哲成氏より一八八八年度活動報告と一九八九年度活動方針、決算と予算についても報告、提案がなされました。また、人事についても提案され、会員名簿の発行についての質問のあと会場の拍手ですべて承認されました(別項参照)。

二日目の最初は、「日雇労働者の高齢化と寄せ場の医療問題」という題で、各寄せ場から医療問題に関わっている三人をパネラーとして問題提起と討論を行いました。

山谷からは影士優氏。山谷の医療を考える会のメンバーです。

影士氏は図によって山谷では医療が受けられない仕組みを説明し、山谷の医療を考える会の活動内容と寄せ場における医療の考え方について話をすすめました。

越冬開会の医療班からいくつかの教訓を得て、その支援メンバーを核として山谷の医療を考える会の活動は始まった。資格・経験・知識のないものが医者の手元で関わることへの疑問があった。労働者との出会いについても、初めての出会いで信頼関係はなく治療で手一杯。労働者のおかれた状況、健康を害している背景まで及ばない。一年を通じての取り組みが必要であると考え、週二回の医療相談を始めました。

「惨めな生活」を「市民社会に近づける」のではなく、日雇労働者の生きざまに会っていくことをテーマに活動をすすめている。メンバーはしろうとで、薬を与えることはない。ドライヤー・マッサージをしながら、きた労働者と話をする空間を、生活の話や労働の話ができる関係をつくってきた。

山谷は医療が受けられない仕組みとなっている。治安目的で建てられた城北福祉センターの「二階建」システムにより、福祉事務所に直接いけなくならない。様々な施設を一人の日雇労働者がぐるぐる回って、結局治療が受けられない。その日の痛みを忘れるために、酒のみ、次の日に施設にいけない。今後の課題として、日雇労働者が仲間の力でなおっていくための取り組みの一つとして、救急車への添乗ができるようにしていきたい(現在は支援の添乗はできるが日雇労働者ではない)。

続いては笹島診療所の藤井克彦氏です。藤井氏はまず、笹島の特徴を説明したあと、寄せ

場の労働者がいかに健康を破壊されているのかを診療活動のデータによって説明しました。特徴としては、建設労働などに起因する筋骨格系疾患、食生活や年齢からくると思われる消化器系疾患、循環器系疾患が多い。他に結核、糖尿病、アルコール依存症などで、慢性病、長期の入院を必要とするものが多く寄せ場労働者にとっては完治しにくいし、再発しやすい病気が多い。

また、行政の実情について整理し、問題点をあげました。寄せ場労働者のおかれた状況を社会問題として取り組む姿勢がなく、個人の責任にしている。一時宿泊所や軽作業所がなく、入院・入寮の必要になる重い症状になるまで野宿をしておけ、となっている。電話一本で入院できる病院、迎えにきてくれる病院を求めるので私立病院が優先され、そこに行政との癒着関係が生まれる。内科で行ったのに精神病院にいられるなど問題が起こっている。

最後に、寄せ場の医療に関わる者の問題をまとめました。

①労働者と共に健康を破壊されている状況をかえていくことを目標にしているが、「与えるー与えられる」関係をかえることができていない。②医療面での現実把握は必要だが、監視一データ（まとめ）Vに終わりがち。医療の対象として労働者をみてしまっており、仲間同士の関係づくりが必要だ。

③行政にやらせることも必要だが限界がある。我々で何か作ればいいのか、また労働者にとって何がよいのか。アジアのスラムでは自らを組織して闘っており学ぶべきだ。④寄せ場労働者に「生きる希望が必要」であり、「主体的に健康を奪い返し、希望をもって生きていくことを望まれる」という我々の総括に批判があった。我々の立つ立場が問われている。⑤ドヤ街がなく寄せ場と関係なく医療活動が

できてしまう。

⑥に共通する例として、「せっかくなこまでなおつてきたのに退院したらまずい」といつてしまっていることをあげ、大事な何かを忘れていると訴えました。

最後は、今日は釜ヶ崎医療連として登場する小柳伸顕氏です。

まず、労働一福祉一医療の三つの状況で考えないといけないとして、釜ヶ崎の労働者の実態を説明しました。

釜ヶ崎では路上で死んでいく人が毎年二百人、三百人、病院で死んでいく人が毎年五百人もいる。仕事があっても野宿する状況があり、これに対して二億円を投入した「クリーン」作戦がおこなわれ、野宿者は市内に拡散している。笹島、山谷、寿でも同じだ。

夏に働いて、秋に身体を壊す。仕事があることが必ずしも労働者の健康を保証しない。病院に入つて何かしてほしい、という気持ちをもたない労働者がいる。医療・福祉のシステムは、人間を「病氣」として扱う。病人をつくりだす政策になっている。一時的に面倒をみるようになっていない。

ひどい例はいくらでもある。一日点滴六本、薬十錠三回、風呂なし、トイレットペーパーなし、介護人なし。労働者を商品として扱い、看護婦や事務員が「また儲けがきた」と平気でいう。行政と病院が癒着し（ワイロを含め）、日雇労働者を媒介に医療産業が繁栄する。嫌な人は飛び出し、がまんする人は病気にされてしまう。なおす気がないのでないのだ。むしろ飛び出す人のほうが人間として一生懸命命生きている。医者判断を切り崩していく必要がある。医療・福祉がよくなればではなく、労働問題として考えなければならぬ。一時的に身体を休め

る場所、自分で健康を守っていく場所が必要である。

この後、パネラーと会場との質疑討論となりました。

まず、藤井氏のまとめの④について質問があり、討論となりました。藤井氏は、この文章は、使い捨てのなかで「自分の体をなおそうという気がおきない」ということで書いた。そして受けた批判は、「こういう表現は差別だ。日雇労働者以外のものには希望があるのか」というものであった。確かに、評論家的であり、日雇労働者になり切れなくても、単なる「対象」にしてはいけない、と結びました。これに関連して会場からいくつかの意見が出されました。

釜ヶ崎医療を考える会の水野阿修羅氏は一連の討論を受けて発言しました。ヤケクソになっている人が多く、やはり「希望をもって生きよう」という主張は正しい。日雇労働者が希望をもつということはどういうことか。組合やれば希望ももてるというも、組合やっている者が本当に希望をもっているのか。人にはそれぞれいろいろな面がある。文化活動も重要だ。一つ提起だが、寄せ場学会で家族の問題を扱ってほしい。

つぎに、山谷城北福祉センターのデータに関連して、「病名」を信用できるのかという話になり、信用できないという結論がでました。アルコールについてはあらかじめ排除されている。その時の医者の専門（興味）によって、病名のデータは大きく変わる。たとえば、胃ガンの専門医がくれば、胃ガンの労働者が増える。完全に興味として労働者を扱っている。

さて話は、メインテーマ「変貌の中の寄せ場」に移りました。山谷からは「よみがえりの里」という

働けない者を收容する施設が建設資本が金を出してつくりだしようとしていることの報告と、「希望」論議に関して、希望なんてそう簡単に語れない。仲間が声をかけるような雰囲気を作っていくことが必要だ、とつけくわえました。笹島では、在日アジア人の日雇労働者は少くも増えていること、「都市づくり」のデザイン博によって排除が進行していること、精神衛生法から保健衛生法にかわり精神病院の対応も変わっていくこと、の三点の変貌が報告されました。釜ヶ崎からは、まず、見た目の変化が指摘されました。ドヤが平均千五百円となり日雇労働者の階層化、分断が進行している。ものの食べ方は、「みんなで食堂」から「ほかほか弁当を一人で」となった。日本社会の分断構造と同じソフトに管理されている。また、やくざが町の中をのし歩くようになった。行政は、「責任は全部個人にある」と思ひの合理化をしている、と報告がされました。「高齢化」に関する質問には、司会の松繁逸夫氏から説明がありました。

総会最後の報告として、水野阿修羅氏（アシアン・フレンズ）から「外国人出稼ぎ労働者と寄せ場」が行われました。水野氏は、寄せ場日雇労働者と国内出稼ぎ労働者との違いを対比して説明しました。一九七十年代に国内の出稼ぎ労働者と残業や休日出勤で対立をした。釜ヶ崎はもとも出稼ぎ労働者の町であり、対立をしながらも彼らの気持ちは自分ごとのようにわかる。造船不況で瀬戸内海から溶接工がきて、釜ヶ崎の溶接工の単価は下がったが、彼らにくるなどはいわなかった。しかし、こと外国人労働者に関しては別の対応である。釜ヶ崎にきてからずっと考えてきたことだが「差別はよくない」だけでは解決しない問題だ。動き先の八割が在日朝鮮人で、悪い飯場の代名詞として「朝鮮飯場」が使

われている。在日朝鮮人は零細業者であるがゆえ、元請などに叩かれたものを労働者にしわよせ、劣悪な労働条件となる。

このあと、水野氏は外国人労働者との連帯について述べました。イギリスのスラム街を形成したアイランド人がアメリカに労働者としていき、日本の労働運動は留学生として働きながら、またアイランド人による排斥に反対しながら、アメリカから学んだ。現在は寄せ場のなかのとしよりが外国人に排除的だが、不況下ではどうなるか。連帯の一つのあり方として、文化がある。欧米の白人で連帯運動をやっているのは、音楽を通して共鳴した十代の若者だ。日本でも朝鮮の歌や芸術に共鳴して連帯運動をしている若者がいる。

水野氏の報告に続いて、カラバオの会、ロアさんを救う会、CALから各団体の抱える現場の状況や入管法について報告と提起があったあと、司会の山崎カヲル氏がまとめて討論の方向を出しました。問題の所在ははっきりしている。①労働現場での問題、②家（生活）の問題、③労働機械の問題、の三点だ。好況の現在は、高齢化した人とのぶつかりだが、不況期にどうなるのか。

このあと、仕事の現場で出会った何人かの人から「寄せ場のシステムとして日本人の低賃金がそのまま外国人出稼ぎ労働者にスライドしている」「日本人の単価が安いところは外国人も安い（駅手配など）」「仕事を奪われる危機感現場ではない」という報告を受けました。

最後に池田氏からかんたんな挨拶を受け、総会は終わりました。

総会成功のため奮闘した東京経済大学の仲間に感謝して、総会報告を終わります。

（水嶋 陽 労働組合書記）

一九八九年度役員

- 会長 池田浩士
- 事務局長 松沢哲成
- 監事 青木秀男
- 運営委員
  - 和田研三／布野修司／関曠野／柴田勝紀
  - 長井公彦／中西昭雄／中山幸雄／松繁逸夫
  - 小倉利丸／加藤晴康／川島尚巳／西澤晃彦
  - 風間竜二／水島陽／藤井克彦／志村哲郎
  - 中根光敏（他3名交渉中）



# 一九八八年度活動報告

はじめに

以下にみる通り、昨年度は概して目標を多く掲げすぎ、的を絞り切れなかった感みがあると反省している。しかし、全般的には、いちおう堅実に二年目「守成」の年を過ごしたとは言えるのではなからうか。ただし、会費の納入状況ははおもわしいとは言えず、次年度以降に大きな危惧を残した。

## A (1) 支部活動の充実

少額ながら二つの支部に予算も割り振り、支部の日常活動の展開に役立てようとした。支部内外ならびに寄せ場で活動する各組合などとの親睦と交流は、今年一年で相当深まったと思う。学習活動も一定積み重ねられ、その一部は年報「寄せ場」に反映されている（No.1 & 2 参照）。

## (2) 通信・年報の刊行

通信は、担当者交代で回数も多くなり、内容も年報を先取りするような理論的提起を載せたりなど、大きな進展があった。他方、遠隔地間の会員相互のコミュニケーションをはかり、編集体制を充実するといった面は、足りなかったように思う。

年報第一号は少々の赤字にとどまった。同二号は、（御覧のように）本総会までに刊行することが出来た。内容的にも、いちおうの水準はいつていると思う。

## (3) シンボジウム

① 全体の企画として「スラムと寄せ場の往環」と題し十月二三日に横浜市立大学において行った。最初にマレーシアの記録映画「ベジャライ」（監督ステファン・タオ）を上映し、ついで講演が柳在順「ソウルオリンピックとスラムクリアランス」、青木

秀男「アジアとスラム」、カラバオの会・渡辺英俊

「日本の中のアジア人労働者」で、まじめは加藤晴康が行った。会場が若干遠かったこと、当日は他にも大きな行事があったらしいことのため、参加者や少なかつたが、講演・報告ともに内容が充実しており、また少数ながら新しい人との出会いもあり、（うち何人かは会員になった）、成果があった。ただし、外国人出稼ぎ労働者問題について、本学会としてならんかの結論を得たいとしていた当初の目的は、達成するまでにはいたらなかった。

② 西日本中心の秋季連続講座は、企画が固まらず、延期した。

## B (1) 調査の実施

力量不足で今年はまだ手が着けられなかった（やる気のある人を募る！）。

## (2) 資料の集約と公開

着手するにいたらなかった山谷労働福祉会館も出るであろう一九八九年度こそ、性根を入れて取り組むつもりである（協力者募集中！）。

## (3) 労働ゼミの実施

本年度も釜ヶ崎において二月二六日から三月四日を予定したが、参加者が少なく、取りやめとなった。

## (4) 遊説と販売促進

「上記すべてをやり切った後に余力があったならば」として、表題の事項を挙げたが、とうていそういった余裕はなかった。



# 一九八九年度活動方針

昨年度の網羅一羅列方針の破綻に鑑み、今年度は重点目標を何点かに絞りたいと思う。日本寄せ場学会もはや三年目に入るので、今年こそは全国的な組織固めを行うとともに、研究活動の上で本学会らしい顕著な成果を挙げたいと考える。



## (1) 「寄せ場に関する文献目録」の作成

会設立以来の課題でもあるので、先行の書誌などを活用してにもかくにも第一稿を作ることを一九八九年度の最重要、最重要、目標としたい。寄せ場に関する文献をリストアップし、所蔵機関を調べ、コピーを取るなどして内容を把握すること。この三項目を本年度末までにやり切ることによって、内容梗概をつけた「寄せ場に関する文献目録」の第一稿を仮に造り上げることにはしたい。公開に耐える、水準を越えたものをつくるのが出来るかどうか、お金と人手のないところでその両方がたつぷりかあることをしようというものだから、なかなか困難である。ぜひとも会員諸兄姉の絶大な協力（知恵でももちろんお金ならなおさら、結構です）を仰ぎたいと思う。（アンケートは三〇通以上返ってきました。いろいろ御教示もありました。ご協力に感謝します。（この件担当は松沢、西沢）。

## (2) 『日本寄せ場学会通信』

の充実と出張講座の開催

組織固めのために『通信』の発行を、六月中旬、九月中旬、一月中旬、三月中旬に固定し、広島、福岡、寿町、笹島、山谷、釜ヶ崎など各寄せ場の状況を知らせてくれるよう特定の個人にお願いする。つまり「通信員」という訳である。

もちろん、その他内外からの連絡やお知らせなども、前にもましてどんどん歓迎していくつもりで

ある（この件担当、中根、志村）。

福岡で寄せ場に関する学習会を開く予定が、最近本会に人会したメンバーを中心に進められており、講師の依頼の話もあるという。時期などの都合がつかずならば、運営委員メンバーでそういった機会を利用して、なるべくたくさん参加したい。もし、広島、仙台などについても、同様の企画を考えたい。

なお、年報「寄せ場」第二号は、苦闘の末、分厚いものが出来た。編集関係者の尽力に感謝したいと思います。三号は、段取りと体制をさらによく整えて、第四会総会までにはぜひ余裕をもって発行したいと考えている。

## (3) 調査

前年度において、山谷の調査が挫折しているので、今年は規模を縮小して実行したい。笹島の山本寿夫さんをはじめ、山谷、寿町などの高齢の方や、とにかくインタヴューに応じてくれる労働者や、場合によっては地域住民でも、聞き書きをとる計画だ。聞き書きには、裏付けとなる文献資料が重要なので、先の(1)の文献の調査・リスト作りとの連携・連絡を密にしたい（担当、斎藤、他に募集中）。

## (4) シンポジウム

一月二日に名古屋で「情報化時代と寄せ場」といった名のシンポジウムをやりたいと、いったんはおおまかに話されたのだが、その後四月二三日の運営委員会において種々詳しく検討した結果、内容・タイトルを含めもう一度協議することとなった。対外的に打って出るより先にまず本会としての主体の充実が大切では、というような根本的な議論も出されているので、多数の意見を是非寄せていただき

# 1988年度決算

・収入	593,339円
	(会費納入者93名/全会員数201名)
・支出	
第2回総会関係	36,000円
『寄せ場学会通信』	217,100円
通信費	95,620円
山谷調査関係	0円
秋季シンポ	82,242円
年報編集費*	114,236円
雑費	31,615円
支部活動費	160,000円
出計	736,813
支計 赤字	-143,424円

\*年報の制作費並びに販売代金については別会計とする  
 年報(発想諸経費+贈呈分)102,000円は次年度会計

へ繰越

# 1989年度予算

・収入	1,900,000円(見込み)
	(正会員180名+学生20名)
・支出	
第3回総会関係	10,000円
『寄せ場学会通信』	80,000円
交通・通信費	100,000円
調査・資料代	50,000円
シンポ経費	50,000円
年報編集・政策費	100,000円
前年度繰越	102,000円
支部活動費	160,000円
会館部屋代	600,000円
予算費	354,576円
前年度赤字	143,424円
計	1,900,000円

## 運営委員会のお知らせ

日時 七月八日(土)午後二時

場所 大阪・同和地区総合福祉センター

旧国鉄環状線芦原橋下車(☎06-561-4194)

## 東日本支部例会のお知らせ

日時 七月一日(土) 1時

場所 東京女子大松沢研究室

講師 藤田進氏(東京外語大アラビア語)

題目 「パレスチナ難民キャンプと寄せ場」

日時 七月二十九日(土) 一時

場所 東京女子大松沢研究室

講師 中野隆宣氏(朝日新聞編集委員)

題目 「ヨーロッパの外国人労働者、最近事情」

## 西日本支部例会のお知らせ

日時 七月一六日(日) 一時～三時

場所 同和地区総合福祉センター(豊洲4丁目)

題目 釜ヶ崎夏祭り等

## 編集後記

本号より通信の編集は、西日本の中根・志村が担当することになりました。投稿原稿は西日本支部宛にお送り下さい。

多くの会員の方の投稿を歓迎します。特に、大阪、東京以外の普段なかなかお会いできない会員の方、よろしく願います。通信に関するご意見も歓迎します。

次号の原稿の締め切りは八月二〇日です。次号は、笹島の藤井さんからの報告も掲載する予定です。